

表現の哲学としてのメルロ＝ポンティ哲学

田中雄祐(岡山大学)

メルロ＝ポンティの哲学は、一般的に 3 つの時期に区分されている。すなわち、『行動の構造』(1942 年)や『知覚の現象学』(1945 年)といった著作に代表される前期、ソシュールの言語学の影響を受けた中期、そして晩年の遺稿『見えるものと見えないもの』(1959-61/1964 年)に見られる存在論が展開される後期である。そして、このようなメルロ＝ポンティの哲学における変化をどのように理解するかは、古くから研究者の間で課題とされてきた。

ルノー・バルバラス(Barbaras 1991)とドナルド・ランデス(Landes 2013)は、ともにメルロ＝ポンティの哲学の変遷を理解する上で「表現」という概念が鍵となると考えている。ところが、一方でバルバラスは、『知覚の現象学』においても表現と言語の問題が主題の一つとして扱われていたが、そこには重大な盲点や欠陥があり、その欠陥を見直す過程において 1950 年代に表現や言語の現象の研究が行われ、結果として存在論への移行が起こったと考える。他方で、ランデスは、バルバラスと同様に 1950 年代になってメルロ＝ポンティが「表現」に注目するようになったことは認めるが、それがきっかけとなった新たな方向へと哲学が展開されていったとは考えない。むしろ、メルロ＝ポンティの哲学は一貫して「表現のパラドックス」をめぐる展開されており、1950 年代の「表現」への着目は初期の著作において発見していたにもかかわらず、十分に認識できていなかった「表現」の探求の射程と有効性に気づいただけとするのである。

本発表では、(1)メルロ＝ポンティの哲学全体の一貫性を主張する上記のランデスの立場を支持しつつも、ランデスのアプローチは不十分なものであり、(2)代わりに「循環的因果性 *causalité circulaire*」という概念を鍵として同様の主張を擁護する

(1)ランデスは、「表現」は純粋な反復と純粋な創造の間にあるものであり、両者の間の「逆説的な論理」を「表現のパラドックス」と呼んでいる。

一方で、メルロ＝ポンティは、「表現」が純粋な反復であることを否定する。「表現」はあらかじめ存在している原文を翻訳するだけの作業、例えば心の内側に存在している思惟を外部へと表明するだけの作業ではなく、創造的な作業であり、「表現」とするものは、「表現」によってはじめて創り出されているのである。

他方で、「表現」は純粋な創造でもないのであって、全くの無から自由に創造することはできない。「表現」を行うときには、ランデスが「負荷(*weight*)」と呼ぶ様々な制約を受けており、創造はあくまでその制約の下で行われる。例えば、言語表現においては、話者は既に自由に使えるようになっており、他者と共有されている言語(表現手段)に制約されている。ところが、「表現」においては既存の表現手段を用いつつも、それを捉え直すことによって新たな意味が生み出されているのである。

ランデスは、この「表現のパラドックス」と呼ぶ「逆説的な論理」が、明示的には「表現」について語られていない前期の『行動の構造』や政治的な著作、後期の『見えるものと見えないもの』に至るまで見出すことができるということを示して、メルロ＝ポンティの

哲学が「表現」の哲学として一貫していると主張する。しかしながら、ランデスのようなアプローチの仕方では、初期の著作において用いられている主要な概念と「表現」との関連や連続性が必ずしも明確になっているとは言い難い。

(2)以上のことを背景に、本発表では、(a)「循環的因果性」という初期の生命論において用いられている概念に着目し、(b)それが『知覚の現象学』や 1950 年代の著作においても引き継がれ、表現論として展開させられていることを明らかにする。

(a)『行動の構造』において、メルロ＝ポンティは知覚と運動、主体(有機体)と対象(環境)を截然と区別し、知覚と運動の関係が、入力と出力、刺激と反応といった線的なものであると考える古典的な認知モデルを批判し、「循環的因果性」という概念を提示する。このとき「循環的因果性」は以下のような特徴を持っていることが読み取れる。

「循環性」と「全体性」:有機体の構造は特定の物理化学的物質に適合するようになっているが、そのような構造を持つ有機体はその物質を有意味な何かとして把握する以前にはいかなる意味も持っていない。それゆえに、主体(有機体)と対象(環境)は相互依存関係にあり、一つのシステムを形成している。

「創造性」と「自律性」:外部から与えられる刺激が有意味なものとして把握されるのは、有機体は自身の「規範」に従って自律的に「環境世界 *Umwelt*」を創り出しているからである。

「従属性」と「再組織化」:有機体は生存するために、「環境世界」との間で一定の平衡状態を維持するように拘束される。もし一定の平衡状態が崩壊してしまうと、有機体は自らの構造を再組織化することで、新たな平衡状態を創り出しそれを維持しようとする。

「差異性」:有機体とその「環境世界」は一つのシステムを形成しているのであるが、有機体が生存している以上、「理念的統一」としての有機体と「環境世界」とは区別されている。

(b)次に、この「循環的因果性」から導き出された上記の特徴が、引き継がれ、発展させられていることを示すのが目標となるが、とりわけ、『感覚的世界と表現の世界』(1953/2011 年)というメルロ＝ポンティが知覚と表現との関係について述べている講義ノートに着目する。というのも、そこでは「身体図式 *schéma corporel*」という概念について詳しく論じられているからである。

「身体図式」は既に『知覚の現象学』においても取り上げられていた。「身体図式」とは運動志向的性質によって身体的・実践的に世界へと関わり、身体の諸部分や様々な感覚様相を統合するものであり、この概念は主体と世界との間の循環的な過程を表している。それゆえに、この「身体図式」を通して、「循環的因果性」が「表現」へと展開しているということを明らかにすることができよう。

・主な参考文献

- Barbaras, R. (1991). *De l'être du phénomène: Sur l'ontologie de Merleau-Ponty*. Grenoble: J. Million.
- Landes, D. A. (2013). *Merleau-Ponty and the Paradoxes of Expression*. London: Bloomsbury Academic.
- Thompson, E. (2007). *Mind in Life: Biology, Phenomenology, and the Science of Mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.